

さけ・ます漁業振興事業調査（サクラマス関係）

（抄 録）

高 坂 祐 樹

市場・魚体調査

県内の主要水揚げ港において標識魚の混入率を把握することを目的に調査を行った。白糠、大畑、深浦での1997年漁期における標識魚混入率はそれぞれ9.43%、3.66%、0.45%であった。近年の経年的な推移から比較すると、白糠は10%、深浦は0.5%前後で推移しており、今期も同様の傾向を示している。それに対し大畑は、7%前後で推移していたが今期は3.66%と大幅に減少した。本県の標識部位である脂+片鱭切除魚の混入率は白糠、大畑でそれぞれ1.01%、0.51%であった。

幼魚分布移動調査

県内8地区の定置網に混獲されたサクラマススモルト幼魚の採集を依頼し、混獲された年月日、体サイズ、胃内容などから幼魚の回遊経路や生態的特徴を把握する目的で調査した。混獲されたサイズと時期からは回遊を示唆することはできなかったが、日本海で混獲された幼魚はやや小型化の傾向にあった。標識魚混入率は1985年以来、太平洋では2番目、日本海では過去最高の高い割合となった。胃内容組成は太平洋では端脚類、日本海側で魚類が最も多く、これまでに行われてきた結果と同様の傾向を示した。

生息環境調査

スモルト降海時期の生息環境を把握するために、太平洋・日本海のスモルト放流河川前面海域において、水温・塩分を測定とプランクトン採集を行った。調査海域における水深10mの平均水温は、太平洋に位置する老部川よりも日本海に位置する追良瀬川が常に高く推移した。プランクトン組成は両海域ともカイアシ類が最も多かったが、季節によってはミジンコなどの枝角類が卓越していた。プランクトンの中で、サクラマスが主食としていた端脚類の出現頻度は低かった。端脚類やオキアミ類などの比較的遊泳能力のあるプランクトンは昼夜鉛直移動を行うため、昼間の鉛直ネット曳きでは、海底付近に生息しているプランクトンは採集されにくいため、分布量を正確に把握できないということが懸念された。